

とうゆう

糖友ニュース

第92号

平成21年1月1日 発行

編集人：とうゆうニュース編集委員会
委員長 松葉 育郎

発行人：関東甲信越地方連絡協議会
会長 大槻 瀬平

発行所：(社)日本糖尿病協会
関東甲信越地方連絡協議会
〒339-8701 長野県松本市芳川村井町1209
まつもと医療センター松本病院研修棟内
TEL 0263-57-2148 FAX 0263-57-5128

糖尿病 最新の話紹介

糖尿病治療の進歩

神奈川県支部推薦理事
川崎市立井田病院内科

半田 みち子



これをお読みになっている皆様のなかには、つい最近糖尿病といわれた方や、もう50年以上糖尿病とお付き合いしている方などさまざまな方がいらっしゃると思います。私が糖尿病の治療に携わるようになって約20年が経ちました。今振り返ってみると糖尿病の治療もここ20年で随分進歩しました。

おぼろげな記憶を頼りに20年前のことを思い浮かべてみますと、当時はまだペン型のインスリンではなく注射器（使い捨てシリンジ）でした。ヒトインスリンにはなっていましたが、中間型と速効型しかなくミックス製剤が出てきたのはしばらく経ってからでした。当時は1型糖尿病にやっと強化療法が始まったばかりで、2型糖尿病のほとんどは中間型の1・2回打ちでした。インスリン導入も今よりはるかに遅くて、インスリンは最後の手段と思われていましたし、内服薬はSU剤だけとっていい状態でした。当然血糖コントロールは今よりはるかに悪く、コントロール目標も甘いものでした。ちなみにコントロール指標はヘモグロビンA1cではなくヘモグロビンA1で、これが9%以下ならOKでした。また、空腹時血糖が重要視されていたので、患者さんは食事を摂らず早朝に来院し、朝の採血室は空腹のため殺気立っていたものです。血糖自己測定器はすでに存在しており、少し上の先生方は入院患者さんの血糖

がすぐに測定できるようになったため非常に喜んでおられました。患者さんでこれを使うのは特別熱心な方か1型糖尿病の若い方だけでした。程なくしてペン型注射器が出現し、血糖自己測定器もどんどん改善してきました。この頃からインスリンが手軽に使用できる雰囲気になってきたように思います。その後さらに新しい経口血糖降下剤やインスリン製剤、使い勝手の良いペン型注射器などが次々に開発され、今では糖尿病の治療手段も随分多くなりました。2型糖尿病でも早期にインスリンが導入され、強化療法さえも当たり前になりました。1型糖尿病ではCSIIがかなり普及してきました。また血糖（正確には皮下組織液糖濃度）の24時間持続モニターも可能となりました。それと並行して高血圧や脂質異常症の良いお薬も増え、患者さまの予後は、きちんと治療さえしていれば、かなり良くなってきたはずですが、問題は増え続ける患者数で、最近では糖尿病の予防にも重点がおかれるようになりました。糖尿病の予防に食事や運動が大切なのは言うまでもありませんが、糖尿病の発症予防に有効であることが証明されたお薬さえあります。

今から20年後糖尿病の治療はさらに進歩しているでしょう。将来は、治療が進歩した結果、今の結核のように、糖尿病はもしかしたら減っていて、「過去の病気」になっているかもしれません。